

---

「聖母の都市シエナ」の美術形成初期の祭壇画プログラム  
—ガイド・ダ・シエナ作《十字架を昇るキリスト》の図像分析—

---

13世紀後半にシエナで活動したガイド・ダ・シエナに帰属される小板絵《十字架を昇るキリスト》(ユトレヒト、カタライネ・コンヴェント博物館蔵)は、19世紀にシエナ近郊の修道院から発見された他の物語小板絵群(シエナ国立絵画館ほかに分蔵)とともに、「受胎告知」から「キリストの埋葬」までの12場面からなる長編の新約聖書物語連作の一部をなしていた。20世紀前半から、元来この連作が聖母子図を中心とした祭壇画の一部であった可能性が議論されはじめ、複数の再構成案が提出された。

現在シエナ大聖堂の誓約の礼拝堂に納められている《誓約の聖母》は、1260年のモンタペルティの戦いでのシエナの奇跡的勝利における聖母の特別な加護を記念して制作され、1270年代にシエナ大聖堂身廊の祭壇に設置された。この半身像の聖母子図の両脇に物語連作を6場面ずつ配置し、上部に《聖母戴冠》(コートールド美術館蔵)を頂く切妻型横長板絵であったとする再構成案(Manzke 2001)は、形式的に前例がないため疑問視されたが、その後さらなる物理的分析によって裏付けられた。付随する物語連作に聖母の役割を強調する図像プログラムを認める観点からも再構成案は支持されている。

本発表ではこの物語連作に含まれる《十字架を昇るキリスト》の図像分析を通して、この主題の選択自体が祭壇画の制作意図を強調する上で本質的であったことを新たに指摘し、本祭壇画を「聖母の都市シエナ」としての意識的な都市国家の美術制作の始点に位置付けることを試みる。

「十字架を昇るキリスト」に関しては聖書に記述はないが、13世紀の瞑想録では磔刑直前に衣服を完全に剥がれたキリストの腰を聖母が自らヴェールで覆った様子が語られている。先行研究では、キリストが自ら十字架に昇るという特異な図像の作例はガイド以前に見つかるものの稀で、本作でマリアが死刑執行人の一人を制しキリストを守るように抱きかかえる積極的な態度を示すのは「聖母の都市」シエナの観者に図像を適応させた結果としている。発表者はこれを支持した上で、当時この種の物語連作において「磔刑」直前の挿話として頻出する「十字架の道行き」ではなく「十字架を昇るキリスト」が選択されたことにこそ、本プログラムの要である聖母の介入をより明らかに視覚化しようとする注文主と画家の創意が認められることを指摘する。

新たな図像を含む形式的にも前例のない祭壇画が誕生した背景には、当時拡張工事が完了したばかりの新大聖堂内部にふさわしい装飾プログラムを用意しようとしていた都市国家シエナの野心的な意図を汲み取れる。1311年に主祭壇にドゥッチョの《マエスタ》の大作が設置される40余年前から、大聖堂は都市美術制作の実験的な場であり、聖母の奇跡的な介入を記念する本祭壇画は意識的な「聖母の都市シエナ」の美術形成の出発点であったと結論づける。